ワレン・ファレル著/久米泰介訳

『男性権力の神話
——《男性差別》の可視化と撤廃のための学問』

評者：田中　俊之

男性性研究における男性の「生きづらさ」という問い

男性の「生きづらさ」への注目

日本語版『男性権力の神話』には，家族社会学者の山田昌弘による次のような推薦文が添えられている。「日本でも，男性の平均寿命は女性より七歳短く，自殺率は高い。何よりも『男性が妻子を養うべき』という意識はアメリカ以上に強い——中略——確かに権力をもって，それを十分に使い優位に立っている男性もいるだろう。しかし，権力をもっていると言われながら，社会的に生きづらい男性が増大していることは確かなのだ——中略——本書は，アメリカについて書かれたものだが，むしろ，生きづらい男性が増えており，『男は強い』という考えが残り続けている日本でこそ，本書で展開されている状況の理解が必要ではないだろうか」[Farrell, W 1993 = 2014：1-2]。

確かに，日本では，男性の「生きづらさ」が世間の注目を集めている。NHK の『クローズアップ現代』で放送された「男はつらいよ2014——1000 人 “心の声”」では，「いま幸せだと感じている男性が３割に満たない」というデータの紹介から番組が始まり，さらに，男性の幸福度は女性と比較して低く，そうした傾向が続いていることが指摘された。こうした分かりやすいデータのみで男女をめぐる議論を進めると，男性と女性の対立を煽るだけの水掛け論に陥りがちである。問題はそれほど単純ではない。調査の詳細を確認する必要がある。

番組で紹介された幸福度に関するデータは，『平成 26 年度版 男女共同参画白書』に掲載された特集「変わりゆく男性の仕事と暮らし」からの引用である。白書には就業状態別・男女別の幸福度が掲載されている。最も幸福度が低かったのは失業者で，男女でそれほど差はなかった。そして，最も幸福度が高いのは学生である。所属がありながら，仕事をしていない状態が彼ら／彼女らの幸福度を高めていると考えられる。唯一，男性よりも女性の幸福度が低いのは正規雇用者という結果となった。つまり，男女別の幸福度はあまりにデータとして単純すぎであり，このデータからまず理解するべきなのは，仕事や所属が人々の幸福度に与えている影響の大きさなのである。

仕事と幸福度の密接な関係を踏まえた上で，同白書で注目するべきなのは次の一文である。「男性は，建設業や製造業等の従来の主力産業を中心に就業者が減少し，平均所定内給与額も減少しているが，労働力率では世界最高水準となっている」。平たく言えば，これまで多くの男性が雇用されてきた職場は失われつつあり，給与も減る一方であるが，それでもほとんどすべての男性は働き続けているということになる。山田が指摘しているように，「男は強い」というイメージと現実の男性たちの姿はあまりにかけ離れているようにも思われる。W. ファレルの主張は日本でこそ受容されるべきなのだろうか。

二分法的なジェンダー論の限界

ファレルは，公的領域においては男性支配が，私的領域においては女性支配が展開されていると想定しているため，社会の現状を，男性支配と女性支配が組み合わさったものとして認識する。「フェミニズムの欠陥は，支配と性差別が一方通行のものであるという前提である」[Farrell, W 1993 = 2014：102]。ファレルは女性差別の存在を否定しているわけではない。女性差別と当時に，男性差別の存在を可視化し，その抑圧性を問われなければならないと主張しているのである。

このようなファレルの議論が，1990年代初頭に展開されたことに注目したい。男性性研究の世界的権威として日本でも知られるR.コンネルは，1987年に出版された*Gender and Power*（『ジェンダーと権力』1987 = 1993）の中で，女性／男性をそれぞれ内的に同一性のあるカテゴリーとしてあつかうことができると認識する理論的立場を，「カテゴリー理論」（categorical theory）と名づけ，批判を展開している。カテゴリー理論による分析では，カテゴリーとしての女性／男性の関係性が，マクロな観点から考察される。女性／男性というカテゴリー間にどのような権力関係があるのかについては，本質的に直接的な支配関係にあるとみなす，あるいは社会階層として把握するなどいくつかの種類がある。

観点の違いがあるにしても，コンネルはカテゴリー理論によるジェンダーの理解には難点があると指摘する。「カテゴリー主義は，抑圧のない遠い将来や過去を想定することによって，厳として存在する現在のあらゆる問題を，男性権力と女性の従属のあらわれであるととらえる傾向をもつ」[Connell, R 1987 = 1993：111]。カテゴリー理論においては，男女の権力における非対称性の分析に固執するあまりに，女性／男性というカテゴリーが固定化されてしまっている。つまり，ジェンダー論がそこからの解放を目指しているはずの単純な「生物学的二分法」が，理論の前提を構成してしまっているのである。

1980年代後半になされたコンネルのカテゴリー理論への批判を踏まえれば，ファレルが1990年代の初頭において，男性支配という視点のみでジェンダーが考察されることに対して違和感を抱いていたことには一定の妥当性があると考えられる。

ファレルにおける権力の定義

個人的な体感ではなく，学術的なレベルで，「男性の権力」が神話であり，現実には男性差別が存在していると主張するためには，「あらゆる問題を男性権力と女性の従属のあらわれである」と認識するカテゴリー理論の難点を指摘するだけでは十分ではない。当然，権力と社会構造について理論的な枠組みが必要になる。

しかし，『男性権力の神話』は，理論的な枠組みの提示はほとんどなく，男性が男性であるだけでいかに被害を受けているかがデータと共に紹介されるという構成上の特徴がある。なぜそれが男性差別であると言えるのか理論上の説得的な根拠が提示されないまま，次々と，女性差別を助長するような事例の紹介がされる。ファレルの男女観に関する基本的な認識は，次のようなものである。「女性たちは，“抑圧者”と同じ両親を持ち，中流階級でしばしば“抑圧者”よりも上位の階級に生まれ，その文化の中の豪華な装飾品を，“抑圧者”よりも持つ，唯一の“被抑圧者”のグループである。そして，“無給労働者”である彼女たちに年間500億ドルの化粧品を買わせてあげる唯一の“被抑圧者”グループであり，彼女たちの“抑圧者”よりももっと多くのお金をファッションやブランド服

に使い，彼女らの“抑圧者たち”よりも，どの時間帯も長くテレビを観る唯一の“被抑圧者”グループである」[Farrell, W 1993 = 2014：33]。

ファレルは権力を，「自身の人生をコントロールする」[Farrell, W 1993 = 2014：46] 能力と定義している。これは社会学の領域では，かなり特殊な権力の定義だと考えられる。よりマクロな観点の権力論はありうるにしても，M. ウェーバー以降，権力は「他者の行為を，その抵抗を排しても自己の意図する方向に制御しうる能力」[長谷川他　2007：79-80] という定義が基本となってきた。ファレルの権力の定義は，他者抜きのものであり，これでは男性自身が感じる男性として生きる上での「生きづらさ」を記述することは可能でも，差別や支配を論じることはできない。

ファレルと同様に，コンネルのカテゴリー理論に対する批判は，男性支配や男性の制度的特権にたいする無理解として解釈されてしまいかねない。強調しておかなければならないのは，コンネルは所得や職業，そして教育などの分野において，ジェンダーをカテゴリーとしてあつかい男女間の格差を記述する研究の意義は積極的に認めていることである。「『女性』『男性』のカテゴリーが絶対的なものとなり，さらなる検討・さらなる区分はなんら必要でないと受けとめられてしまうときに，不具合が生まれてくる」[*ibid.* 107]。ファレルとは違い，あくまで，カテゴリー理論において女性／男性という区分自体の構築過程を問う視座が失われてしまっている点を，コンネルは批判しているのである。

コンネルはジェンダー研究には，具体的な個人の生活と社会構造との相互作用を視野に入れた社会理論が必要だとし，「日常行動にもとづく理論」(practice-based theory) を提唱する [*ibid.* 112]。コンネルは，マクロ的な視点からみれば女性にたいする男性の優位を軸に展開する構造が存在することを認める一方で，この構造が人びとの生活を一義的に決定するわけではないと指摘する。構造は人びとの社会関係のあり方を条件づけるものであるが，同時に，構造は人びとの日常生活における社会関係によって構築されてもいるからである。

こうした構造の二重性を理解するならば，多様な女性性／男性性が存在するということは，人びとがジェンダー構造を生きる際の中心的な事実であるとコンネルは述べている [*ibid.* 115]。コンネルは従来のジェンダー理論を批判的に検討した上で，日常的に観察されるジェンダーの多様性を捨象することなく理論に組み込もうとする姿勢から，複数形としての男性性 (masculinities) という視座を提示した [Connell, R 1995，田中 2009：51-52]。文法上は存在しない男性性の複数形表記は，今日の英語圏での男性性研究では，標準的な表記になっている。

男性性研究の発展のために

10 代の頃，子ども好きで食いしん坊だったファレルは，お気に入りのベビーシッターのアルバイトを辞め，芝刈りのアルバイトを始めたという。

> ベビーシッティングは 1 時間たった 50 セントで，芝刈りは 1 時間 2 ドルであった。私は芝刈りが嫌いだった（私はニュージャージー州に住んでおり，そこでは虫が多く，湿気と，午後の太陽が厳しくて，芝刈りを楽しくないものにしてくれていた。冷蔵庫から何か取り出して食べる方がずっとよかった）。しかし，私はデートができる年齢になると，すぐに芝刈りをするようになった。少年たちにとって芝刈りは，ある種のメタファーである

――私たちがしばらくしたら，たくさんの資金がもらえるという理由であまり好きではない仕事をすることになるということを芝刈りから学ぶのである［Farrell, W 1993 = 2014：25］。

理論的な問題だけではなく，2015 年の日本のジェンダーギャップ指数（経済，教育，健康，そして政治の 4 つの視点から男女平等の達成具合を測定）が，145 カ国中 101 位だったことを踏まえても，日本社会の現状を分析するために，ファレルの議論を受け入れることは難しい。しかし，冒頭でも述べたように，一家の大黒柱としてのイメージと現実の男性の経済状態の間に大きなギャップが発生している現在，仕事を中心とした生き方以外に選択肢を持たない男性が抱える「生きづらさ」という問題が無視されていいとは思えない。

そもそも，ジェンダーが男性性との関連で論じられるようになることは，男性も当事者としてこの問題に向き合うことにつながるのだから，基本的には歓迎すべきことである。重要なのは，男性というカテゴリーの内部における多様性（masculinities）を視野に入れながら，同時に男女の権力における非対称性を問うことである。コンネルの提示する社会理論はこうした条件をクリアしている。男性性研究が理論的にも実証的にも蓄積の浅い日本においては，安易に男性の「生きづらさ」を主張するのは危険であり，コンネルのような理論的な枠組みにもとづき，なぜ男性の「生きづらさ」が「社会問題」として前景化してきているのか，そして，この論点に光が当たることで何が退いてしまっているのかを考えていくことが必要な段階であると考えられる。

（ワレン・ファレル著／久米泰介訳『男性権力の神話――《男性差別》の可視化と撤廃のための学問』作品社，2014 年 4 月，413 頁，2,300 円＋税）

（たなか・としゆき　武蔵大学社会学部助教）

〈参考文献〉

Connell, R.W.（1987）*Gender and Power*, Polity Press.

Connell, R. W.（1995）*Masculinities*, University of California Press.

長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志（2007）『社会学』有斐閣。

田中俊之（2009）『男性学の新展開』青弓社。